

中国人日本語学習者の発音矯正トレーニング についての実践報告

許 挺傑 酒井 たか子

要 旨

本稿では、2010年2月から4月にかけて行った中国語を母語とする初級日本語学習者対象の発音矯正トレーニングの理念と実践について報告する。発音を苦手とする中国人初級日本語学習者に対して、日本語音韻知識についての指導、発音矯正および自律的な発音練習をねらいとした発音矯正トレーニングが有効であると考え、11回の実践を行った。トレーニング前とトレーニング後の学習者の発音において、アクセントの習得などに大きな質的な変化が認められた。また、トレーニング終了後に提出された学習者の感想レポートには、学習者の発音・アクセント習得に対する意欲が高まったことと、今後もトレーニングで実践したことを継続的に練習していく強い意志が述べられており、学習者の自律的な学習につながる事が期待できることが分かった。
【キーワード】 音韻知識 発音矯正 意識化 シャドーイング 可視化

A Report on the Implementation of Pronunciation Correction Training for a Chinese Learner of Japanese

XU Tingjie, SAKAI Takako

[Abstract] This paper is a report on pronunciation training done for a student in a beginning level Japanese language class from February to April, 2010. The student who attended this training was a Chinese student who had low proficiency in Japanese pronunciation. This training had three parts, (1) lessons about basic Japanese phoneme knowledge, (2) correction the student's pronunciation, and (3) instruction in how to continue individual pronunciation practice following the training period.

As a result, a qualitative change was found in the acquisition of accent in learner's pronunciation data. Furthermore, the essay that the learner submitted after the end of the training suggested that the learner would continue to practice pronunciation in the future. This training can be expected to lead to the pronunciation learner's autonomous study of pronunciation in the future.

[Keywords] phoneme knowledge, pronunciation correction, awareness, shadowing practice, sound characteristic visualization

1. はじめに

日本語学習者の中には、発音が他の能力と比べて大きく劣っており、そのために日本語力全体が低いと思われるものも少なくない。発音の問題点は学習者の母語の影響が大きく、さらに学習者個々の能力によっても異なるため、授業中にクラス全員に共通に行う発音指導だけでは解決できない。そこで、発音矯正の必要性の高い学生をケーススタディとして個別指導し、その過程において自立的・持続可能な発音矯正の方法を見出すことを目指した。

発音矯正トレーニングの計画、内容に関しては許と酒井が毎回相談し、トレーニング実践は、中国語母語話者であり自らの学習経験を生かせる許が行った。

2. 発音矯正トレーニングの概要

発音矯正トレーニングを始めるに当たり、授業中に学習者の中から希望者を募ったところ2名申し出があったが、1名は途中から参加出来なくなったため、全11回を通して参加した1名をケーススタディとして紹介する。

目的：持続可能な発音矯正方法の獲得

期間：2010年2月10日～2010年4月12日

毎週1回（1回60分程度）、全11回

対象者：筑波大学留学生センターで補講J300¹を受講していた留学生1名

中国湖南省出身の男性。年齢20代後半。

場所：図書館のセミナー室

3. トレーニングの指針

音声教育については、日本語教育の現場で指導すべき内容や方法に関する教師の共通理解がまだ確立していない（轟木・山下 2009）ため、指導すべき内容や方法を考える際に、発音の上手な学習者の学習方法を参考にすることにした。

戸田（2008）では、いわゆる発音の学習成功者がどのように学習したのかについてインタビュー調査を行った結果、複数の学習者から得られた共通項目の回答として以下の項目をあげている。

- 1) メタ言語としての日本語音韻の学習
- 2) 発音に対する意識化
- 3) 豊富なリソースの活用
- 4) 発音学習方法の実践と継続
- 5) 音声に対する関心とこだわり

6) 学習初期にインプット洪水を経験

以下、これらの各項目の重要性、ならびに受講者のおかれた状況および発音矯正に対するニーズの面から、発音矯正トレーニングの理念と内容を考えることにした。

1) メタ言語としての日本語音韻の学習

学習成功者による音声習得は完全に意味伝達に従事した自然習得ではなく、むしろ、言語形式を焦点化した状況下で行われたものであるという特徴がある。また、音声学や発音の授業を通して自分の発音に対する意識化が進み、音韻規則に対する理解が目標言語音声の産出のために役に立つと考えられる。

このことから、言語知識の学習は発音学習の大事な基礎であることがわかる。また、今回の学習者は、日本語専攻の学生ではないため、来日前の数カ月間、中国の民間の日本語学校で初級日本語を勉強しただけであり、日本語の文法知識や音声知識などについて体系的に勉強したことがないことが分かった。そこで、学習者のニーズに応えるためにも、今回のトレーニングでは、メタ言語としての日本語の音韻知識の学習を実践内容とした。

2) 発音に対する意識化

学習成功者のコメントには、「意識する」「注意する」「気をつける」という表現が繰り返し現れており、ネイティブレベルの発音習得を達成するためには、発音に対する意識化が重要である。

発音に対する意識を高めるためには、単に音韻知識の学習だけでは不十分であり、後述するシャドーイングの可視化作業を通して積極的に意識化を促すことも行った。可視化することによって、発音に対する意識をより高めると同時に、アクセントに対するモニター力やより正確なアクセントの生成力を養うことが可能になると考えたからである。

3) 豊富なリソースの活用

学習成功者は、テレビ、ラジオ、ドラマ、アニメなど、豊富なリソースを積極的に活用していることが多い。

確かに外国語の発音習得を促進するためにリソースの活用は不可欠なものであるが、時間的な制約から今回は特に取り上げないことにし、学習者に豊富なリソースの活用を利用するように促すに留めた。

4) 発音学習方法の実践と継続

学習成功者は、日本語のシャドーイング、スピーチ、歌、演劇、音読など、音声化した学習方法を実践しており、継続していると述べている。

この点は、今回のトレーニングにおいて、一番のポイントとなる項目でもある。本発音矯正トレーニングにおいては、特にシャドーイングを取り上げ、実践を試みた。

5) 音声に対する関心とこだわり

大半の学習成功者は、音声に対する関心が特に強く、ネイティブレベルの発音を到達目標に設定している。そのこだわりの背景には、職業的な動機などが存在する。

今回の対象者にとって、音声に対する関心が非常に高いことはすでに事前インタビューの段階で把握していたため、トレーニング中にさらに強調することはしなかった。

6) 学習初期にインプット洪水を経験

学習成功者は豊富なりソースを活用し、学習初期からインプット洪水を経験していることが多い。

学習初期にインプット洪水を経験することは重要ではあるが、時間的な制約があるため、授業外で積極的に利用するように促すに留まった。

以上、いわゆる音声学習者の成功者のあげた共通項目のうち、本トレーニングで実践可能なものとして、メタ言語としての音韻知識の学習、発音に関する意識化、発音学習方法の意識化を取り上げることにした。

4. トレーニングの方法

この節では、前節で述べた項目について、具体的に採用したトレーニング方法を紹介する。なお、トレーニングの内容は毎回ICレコーダーに録音し、学習の助けとするとともに、記録として残した。

4.1 メタ言語としての音韻学習と発音の意識化

メタ言語としての音韻知識の学習は、トレーニングの前半で集中的に行った。学習者の母語である中国語と日本語の音韻の特徴の比較を効果的に取り入れた。

具体的な指導項目は以下のものを重点的に取り上げ、これらの説明と発音練習を行った。

1. 拍感覚を養うためのモーラ
2. 特殊音 (長音・拗音・撥音・促音・濁音)
3. アクセント

具体的な指導法や指導上の注意は、黄 (1999) を参考にした。ここでは紙面の関係でアクセントの指導例を紹介する。

アクセントの分類は、基本的に強弱アクセントと高低アクセントがあるとされており、英語は強弱アクセント、日本語と中国はともに高低アクセントの言語であるといわれている。中国語は、同じ高低アクセントの言語であるにもかかわらず、中国語母語話者の特に抑揚の点に関する不自然さが指摘されることが多い。

日本語は、1拍だけではアクセントは成り立たず、2拍以上にまたがって初めてアクセントが成立するが、中国語は、1音節の中でアクセントが成立し、さらに4通りのアクセ

ントが可能であることが原因になっている。たとえば、maという音節において、「4声」というアクセントシステムで4通りの型があり、それぞれ意味が異なる。中国人日本語学習者の日本語に見られる抑揚は、それぞれの拍の中にアクセントをつける中国語の発音習慣をそのまま日本語に入れるために起こることが多い。たとえば、傘（かさ：kasa）の場合、本来は、ka拍とsa拍の中にはアクセントは成り立たないが、中国語では、ka、saというものは拍としてではなく、節として存在し、それに、それぞれの節にさらに4通りのアクセントが可能のため、アクセントのない拍の中に、それぞれ4通りのいずれかを持ち込んで、発音抑揚になるのである。

今回のトレーニングの音韻知識の学習においては、まず、学習者の母語である中国語を使って、メタ言語としての日本語の音韻の特徴を中国語と比較して説明し、個別化と一般化を繰り返すことにより、中国語のアクセントと日本語のアクセントとの違い、ならびに日本語特有の高低アクセントを理解させた。こうしたメタ言語としての日本語音韻の学習が、新しい知識を習得するという点だけでなく、発音に対する意識を高める点においても有効であったことはトレーニング後の学習者の感想レポートにおいても確認できた。

4.2 発音学習方法の実践

4.2.1 使用した教科書

この節では、今回のトレーニングで使用した教科書について述べる。基本的に教科書は初級・中級レベルで音声テープが付いていればどのような教科書でも構わないのであるが、学習者になじみのある教科書を使用すると親しみが湧くと考え、学習者がこれまで使用していた教科書を利用することにした。今回、使用した教科書は『新版中日交流標準日本語中級』である。アクセントに特化した教材も出版されているが、それがなくても音声テープ付きの教科書と、適切に音声指導ができる教員がいれば、トレーニングは可能である。学習者にとってはすでに学習したところで語彙や文法の負担が少なく、また利用方法を変えることで新鮮味を持たせることもできる。

4.2.2 具体的な指導手順

この節では、具体的な指導手順について紹介する。

学習者に興味をもった教科書の課を選ばせて発音指導の材料とした。発音練習のためであっても、学習者が面白さを感じない教材を使うことは、勉強意欲を低下させる恐れがある。本トレーニングでは、あらかじめ教師が指定するのではなく、学習者にその選択権を与えた。それにより、学習者の意欲を高める効果があると思われる。

はじめに、選ばれた課の文章の単語リストの音声を繰り返し聞かせ、その単語の上に、音声テープのアクセントの特徴の「マーク」を書かせた。この作業は隣で指導者も同時に

行い、直後に学習者の書いたものと照らし合わせ、アクセントの特徴の捉え方を指導した。

次に、学習者が自らつけた「マーク」に注意しながら、単語を読ませた。指導者は、学習者の音読した音声を、あらかじめ用意したその単語リストのコピーに記述した。

これにより、1. 学習者がモデルの音声を聞いて正しく記述できたか、2. 自ら正しく発音できたかどうかの二つのレベルを同時にチェックさせた。この作業で、記述と生成の両方において、成功したのから、両方において失敗したものまで、4タイプが明らかになる。間違いがある場合は、教師がモデル音を提示し、できるようになるまで読ませる。特にできない発音、アクセントを取り上げて説明し、練習させる。さらに、それらをもとに、学習者のアクセント認識と生成にどのような問題があるか、より詳細に把握することができるようになり、具体的な対策も立てやすくなると思われる。

以上と同じ作業を段階的に、単語レベルから、単文レベル、段落レベルへと拡大していきながら、作業の繰り返しを行う。

以上のことを実践することによって以下のような成果が期待できる。

①文章全体の音声的な高低の流れをつかめる。②複合語や文節のまとまりによってアクセントが変化することに意識することができる。③自分の発話をモニターし、矯正できる力を養うこと、つまり、モニター力の育成に繋がる。④継続することによって、日本語の感覚（語感）を養うことができ、学習者が自律的に学習できる力を養うことができる。

5. 指導の成果

今回の指導で得られた成果については、実際に学習者の音声資料を聴くのが最も変化が分かりやすい方法であるが、それは不可能なため、ここでは、トレーニング中に学習者が独自の方法で日本語音韻特徴を可視化した文章の一部を紹介するとともに、トレーニング終了後の学習者による感想レポートなどから、指導成果について検討したい。

5.1 学習者が行った日本語音韻特徴の可視化作業

学習者が独自の方法で日本語の音韻特徴を可視化した文章の一部は本報告書の最後の資料1に提示する。

資料2には、筆者が大学時代に行った日本語文章の音韻特徴の可視化の方法を参考のために示す。資料2を見てわかるように、筆者は、単語や文節のアクセントだけにとどまらず、文末のイントネーションも可視化の対象とした。この点は、後述する学習者の可視化の仕方との異なる点である。

ここでは、トレーニング中に学習者がどのような方法で可視化を行ったのかを資料1の一部を利用して、紹介する。

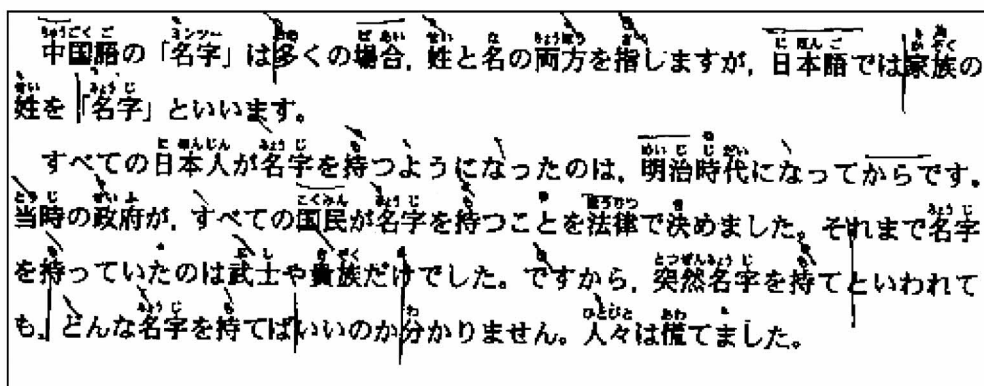


図1 学習者が可視化作業を行う際に用いた「マーク」

まず注目してほしいのは、「多く」(一行目)「姓」(一行目)「指します」(一行目)などの上につけてある「\」の「マーク」である。この「マーク」は、その単語や節においては、その箇所のアクセントが高いことを示している。

次に「中国語」(一行目)、「日本語」(一行目)、3行目の「明治時代になってからです」の「明治」「から」などの上につけてある「—」の「マーク」は、そこは抑揚のない平板型のアクセントであることを示している。さらに、「中国語の名字は」、「日本語では」「家族の姓を」の後ろにつけてある「|」の「マーク」もあるが、それは、そこでいったん間をおくことを示しているという。このように、音声特徴の可視化作業を行う際に、学習者は複数のしるしを用いて可視化を行っていたことが分かる。

「マーク」の種類は多種ではないが、それらをつけることによって、今まで気づかなかった発音の特徴や、文章全体をどのようなリズムで読むべきかを明瞭にすることができる。

このような作業が、音声学習に対する学習者の意識化を高めるだけでなく、音声学習にも非常に大きな効果をもたらすことが期待される。

5.2 トレーニング終了後のレポート

トレーニング終了後、学習者からe-mailで感想レポートが届いた。日本語で書かれており、文法的な間違いはあるが、学習者の意図が分かるようにそのまま直さず載せる。

こんにちは。違うところ、直して、教えてください。ありがとうございます。日本語の発音の練習は2ヶ月くらいに続いています。①いろいろな以前は注意しないの不足は気づいていました。②たとえば、以前は言葉の声調は自分で感覚して、聞く時も注意しないで、日本人の声調と全然違います。③でもいま、聞くや読む時は気づいて、時々、違うを感じられる、そして直しました。④話す時、促音や長音ははっきりして

いない。⑤なお、<な>と<ら>の発音は明らかにしない。⑥これの改善はむずかしいと思います、でも頑張ってしまう。⑦発音の改善は1、2日じゃない、長期の努力は必要です。⑧日本人みいたために、頑張ってください。最後に、許さんの教えを感謝します。どうも、ありがとうございます。

文中①から⑧の通し番号は今回のトレーニングに関するコメントについて検討、考察するために筆者がつけたものである。今回のトレーニングを通して、学習者にどのような意識的な変化があったかを考察する。

①からは学習者が、発音に対して意識していなかったことに気付いたことが分かる。②、③からは自分の発音が普通の日本人のものとは違うものであることに気づいたこと、以前は周りの日本人の発音や自分の発音などをあまり意識していなかったこと、アクセントなどは、適当にやっていたことが述べられており、今は、聞くとき、読むとき、周りの発音との違いを感じられるようになってそれを直そうと努力していることが分かる。④、⑤からは、学習者が苦手発音である「な」と「ら」の区別や「促音」と「長音」の区別などがまだよくわからないことが分かる。指導の中ではそれなりの時間をかけて矯正活動を行ったつもりであるが、望んでいた効果が得られなかったようである。だが⑥では、学習者自身も苦手発音の克服は困難を伴うことを認識しており、継続的に練習していこうという決意を表明している。⑦、⑧からは、学習者の発音練習に対する決意が感じられる。発音の改善には長期の努力が必要であるとも理解したようだ。

以上の感想レポートから、今回のトレーニングにおいて下記の成果としてまとめられる。

- 1) メタ言語としての音声知識を獲得した。
- 2) 発音の問題点がどこにあるかを知ることができた。
- 3) 発音に対する意識が高まった。
- 4) 動機を高めることができた。
- 5) 持続可能な練習方法を獲得した。

6. まとめと今後の課題

発音を苦手とする中国人初級日本語学習者に対して、日本語音韻知識の学習、発音矯正、自律的な発音練習を基本内容とするトレーニングを行ってきた結果、一定の成果が上げられた。今後の課題として以下のことがあげられる。

今回のトレーニングでは、主にアクセントや特殊音を中心に指導を行ったが、時間の制約のためそれ以外の発音指導ができていない。学習者に寄り添って学習を進める必要のある項目と自立的に学習ができる項目、重要さの度合いなどから、取り上げる内容の適切さ

を見直す必要がある。

学習環境に関して、今回は学習者との1対1で行い効果があげられたが、多数の学習者になった場合はどうであろうか。シャドーイングの利用、可視化の作業、学習者同士の協働学習などは、工夫次第で教室内指導にも取り入れることが可能だと思われる。他にも効果的かつ有効に行うための方法について考えなければならない。

謝辞

今回のトレーニングに関するデータの公開を承諾してくれた学習者に感謝いたします。

注

1. 筑波大学留学センターでは、学習者をJ100～J900のレベル分けを行っている。J100～J300レベルは初級レベル、J400～J600は中級レベル、J700～J900は上級レベルである。J300のこの学習者は初級後半のレベルである。

参考文献

- 于素秋译 (2003) 「日」《日本会話技巧篇》编写委员会 编著 『日本人の心を語る—機能別日本語会話 技能篇』外话教学与研究出版社
- 甲斐睦朗・西尾珪子・宮地裕 監修 (2010) 『新版中日交流標準日本語中級』光村図書出版, 中国人民教育出版社 編
- 黄志軍 (1999) 「日本語音声指導の注意点—初期段階の中国人学習者を対象に—」『日本語の地平線』くろしお出版: 91-102
- 轟木靖子・山下直子 (2009) 「日本語学習者に対する音声教育についての考え方—教師への質問紙調査より」『香川大学教育実践総合研究』18: 45-51
- 戸田貴子 (2008) 「発音の学習成功者はどのように学習したのか」『2008年度日本語教育学会春季大会予稿集』: 61-66

資料1 学習者が独自の方法で日本語の音韻特徴を可視化した例

课文

中国語の「名字」は多くの場合、姓と名の両方を指しますが、日本語では家族の姓を「名字」といいます。

すべての日本人が名字を持つようになったのは、明治時代になってからです。当時の政府が、すべての国民が名字を持つことを法律で決めました。それまで名字を持っていたのは武士や貴族だけでした。ですから、突然名字を持ってと言われても、どんな名字を持てばいいのか分かりません。人々は慌てました。

しかし、名字をつけないわけにはいきません。そこで、多くの人が、地名や地形から名字をつけました。日本の名字に、「木」「林」「山」「川」など自然に關係する漢字が多いのは、そのためです。家が谷の中にあるから「中谷」、近くに大きな杉の木があるから「大杉」とつけられた名字もたくさんあります。また、日本で最も多い「佐藤」や「鈴木」は、昔の武士の名字や、地名からつけられた名字だといわれています。

日本人の名字の種類は、30万近くあります。それでも世界の第2位です。第1位は多民族国家のアメリカで、その数は160万を超えています。一方、最も少ないのが韓国で300程度しかありません。また、世界でいちばん人数の多い姓は「李」で、約1億人いるそうです。

62

(『新版中日交流標準日本語中級』第3課「名字」の一部より)

資料2 筆者が大学時代に独自の方法で日本語の音韻特徴を可視化した例

<p>◆ <u>ネパール人から見た日本</u> <u>昔</u> <感想文></p> <p>私が生まれたのは、ネパールのカトマンズからバスに乗っても半日かかる小さい村だ。だから日本に来たばかりの時は、見るもの聞くものが珍しく、驚きの連続だった。それからもう一年が過ぎた。そして最近は何かに日本という社会を観察できるようになった。不思議に思ったのは、電車に乗っている人たちの多くが黙りこんで、朝から疲れた様子で、少しも幸せそうにみえない。私たちネパール人から見れば夢のような豊かな社会に暮らしているのに、どうしてなんだろう？</p> <p>私の村は貧しい。学校はあるけれど、病院はまだない。しかし村中に笑いがあふれている。例えば、私がいつものように朝起きて鶏の世話をしていないのを知ると、近所の人ややってきて、「タバちゃんはどうしたの」と心配してくれる。誰かの家に病人が出ると、村のみんなが農作業の手伝いをする。今の私はそんな故郷の村がとても懐かしくなる。そして私の国には日本にない豊かさがあると思えるようになった。</p> <p>どうして日本人は幸せそうではないんだろう。物が豊かになっても、人の幸せは増えないのだろうか。そんな疑問がいつも私の頭を</p>	<p>◆ <u>尼泊尔人眼中的日本</u> <随感录></p> <p>我出生在尼泊尔的一个小村庄，从加德满都乘公共汽车到那儿也要花半天时间。所以初到日本时，无论是看到的还是听到的都感到很稀奇，吃惊的事连续不断。</p> <p>从那时起一年过去了。最近开始能冷静地观察日本这个社会了。令我感到不可思议的是，乘电车时大多数人都一声不吭的，大清早就一副疲惫不堪的样子，看上去一点也不幸福。在我们尼泊尔人看来，日本人生活在如梦般富有的社会中，可为什么会那样呢？</p> <p>我的家乡很穷，虽然有学校，但没有医院。可是，村里到处洋溢着欢声笑语。要是我不像往常那样早起喂鸡的话，左邻右舍的人都会到我家去看我，担心地问“塔帕，怎么了？”。不管谁家有人生病，村民们都会主动地去帮他家务农。现在的我，十分怀念故乡的村庄。而且我认为，在我的祖国有着日本所没有的财富。</p> <p>为什么日本人看上去并不幸福呢？难道即使物质生活丰富了人们的幸福也不会增加吗？那样的疑问时常掠过我的脑海。</p>
---	---

(『日本人の心を語る—機能別日本語会話 技能篇』「ネパール人から見た日本」の一部より)